

クリスマスメッセージ

「クリスマスの光」

東 彩子 (西南女学院大学短期大学部宗教主事補・保育科講師)

「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。」

ヨハネによる福音書 1章9節

「クリスマス」と聞くと、皆様は何を思い浮かべるでしょうか。

街を彩るイルミネーション、クリスマスツリー... 風は冷たくても心はふと温かくなり、素朴なキャンドルの光が私たちの心を癒してくれる季節です。住む場所によってクリスマスの風景は様々ですが、私が勤める北九州で唯一のキリスト教主義の女子大では、多くの学生は入学後に初めてクリスマスの意味を知ります。そこで、全学をあげて行うクリスマス礼拝で学生・教職員 80 人程が奉仕する生誕劇を行い、礼拝を共に作り上げる中でクリスマスについて理解を深める機会を大切にしています。私はその監督として台本を作成し、毎年クリスマスの意味を皆様と共に考える時を過ごしています。

さて、この生誕劇のハイライトの一つがヘロデ王の宮殿を三人の博士が訪問する場面です。黄金、乳香、没薬という3つの宝を捧げることから「東方の三博士」とも言われ、ユダヤ人が捕囚にあっていただビロンから来た異教徒の占星術の学者か王であったという説もあります。いずれにしても、ユダヤの信仰とは相対する東方から来た博士たちが、不思議な星の導きによってベツレヘムにたどり着き、イエスを礼拝したことにより、イエス誕生の出来事は一民話ではなく、全世界の人々に開かれた物語とされていきました。日本はまさにキリスト教が普及していない東の国ですから、この役を日本人が演じることは意義深く感じます。

博士たちは、東方で輝く星を見つけエルサレムを訪問し、ヘロデ王に「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と問いました。ヘロデ王は自分以外に王が現れることに不安を覚え、学者たちに調べさせます。そして、救い主がベツレヘムで生まれる預言を知り、博士たちを派遣します。彼らは再び光る星に導かれ、イエスのいる場所に辿り着き、礼拝しました。その後、「ヘロデのところには帰るな」と夢で神からお告げがあったため、王に報告をせずに帰っていきました。

イエスを礼拝する前後の博士たちの心には大きな変化が見られます。礼拝後の彼らは、「王の言葉」ではなく、「神の言葉」に従い計画を変更しました。この出来事から、神様は世界の人々に直接語りかけ、神様の働きのために用いられることがわかります。博士たちは、彼らの国の中でも最高の賢者であり、自らの研究や占星術などを信じて生きていたようですが、星を見上げる人生の旅路の中で幼子イエスと出会い、人生の中心が変わる体験をしたのです。

この物語から 2000 年程経った私たちの夜空にも同じように星は瞬いています。しかし、人々の心は冷え、国と国との対立は後を絶たず、私たちは互いに壁を作り、ヘロデのように自らと違うものに対する警戒心や恐れに心を騒がせている現実が見られます。博士の物語は、そのような、自分の砦を作る私たちの心の目を「わたしと違う」人々にも同じように神の愛が注がれていること、共に天を見上げるように、と語っているようにも思えます。イエス・キリストの誕生は、創られたすべての者を慈しみ愛される神様の愛が、人種、民族、宗教などのあらゆる「違い」を超えて、すべての人に注がれた喜びの出来事なのです。

今年のクリスマスは、博士が空を見上げ輝く星を見つけたように、夜空を見上げてみませんか。私たちは人生を旅する小さな存在です。しかし、平和を願う一人ひとりが天を見上げ、神様の愛に照らされる時、夜空の星たちのように、共に世界に希望を届けるものとされていきます。これが、平和への一歩であり、クリスマスの光なのです。台風による甚大な被害、首里城の火災などの大きな悲しみを前にし、自らの小ささを感じると同時に、私たちの小さな祈りが集められ、この地に希望の光を放つことを心より祈ります。